２－１　「高校生の生活と意識に関する調査」における国際比較

日本の子供たちの自己肯定感（「人並みの能力がある」、「ダメな人間だと思うことがある」）は諸外国に比べ低い状況であるが、前回調査に比べると肯定的な回答が増加し、否定的な回答が減少している。

図1
●私は人並みの能力がある

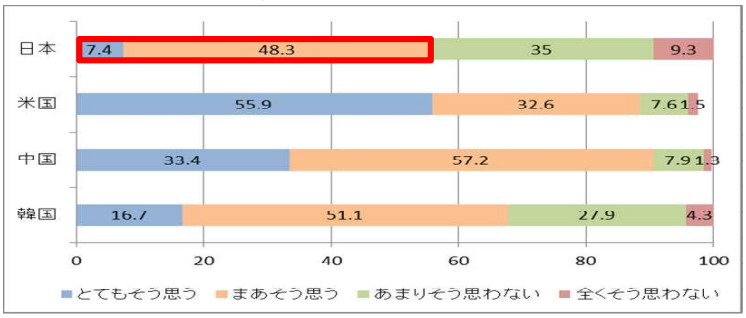


図2
●自分はダメな人間だと思うことがある

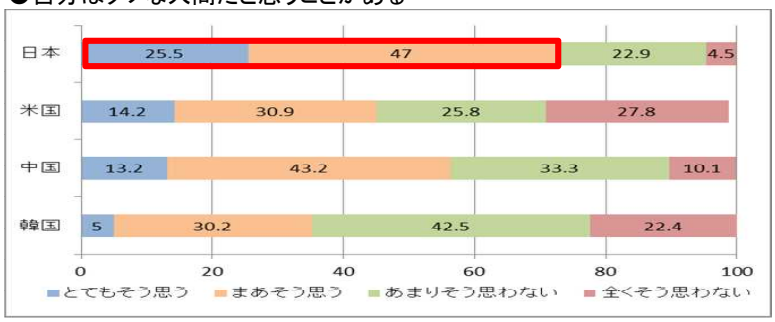


図3
●私は人並みの能力がある

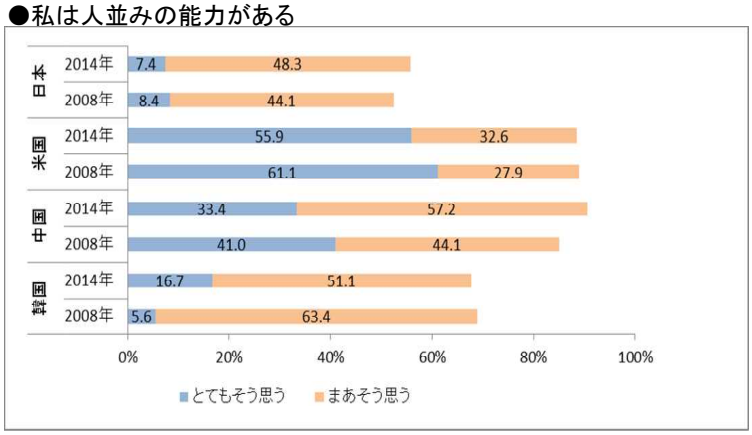
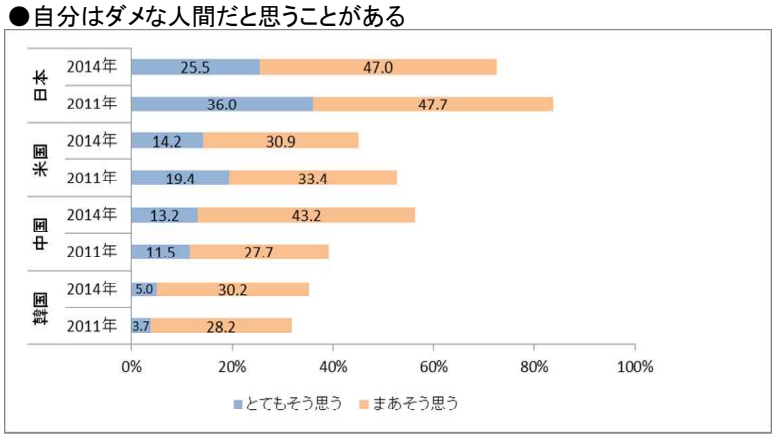


図4
●自分はダメな人間だと思うことがある



※　平成26年度　高校生の生活と意識に関する調査（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の結果から作成。各図の数値の単位は%。

２－２　「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」における国際比較

○ 日本の子供たちの自分自身への満足度は諸外国に比べて低い。
○「自分は役に立たないと強く感じる」子供たちの割合は諸外国と比べて、必ずしも低い状況ではない。

図5
●私は、自分自身に満足している

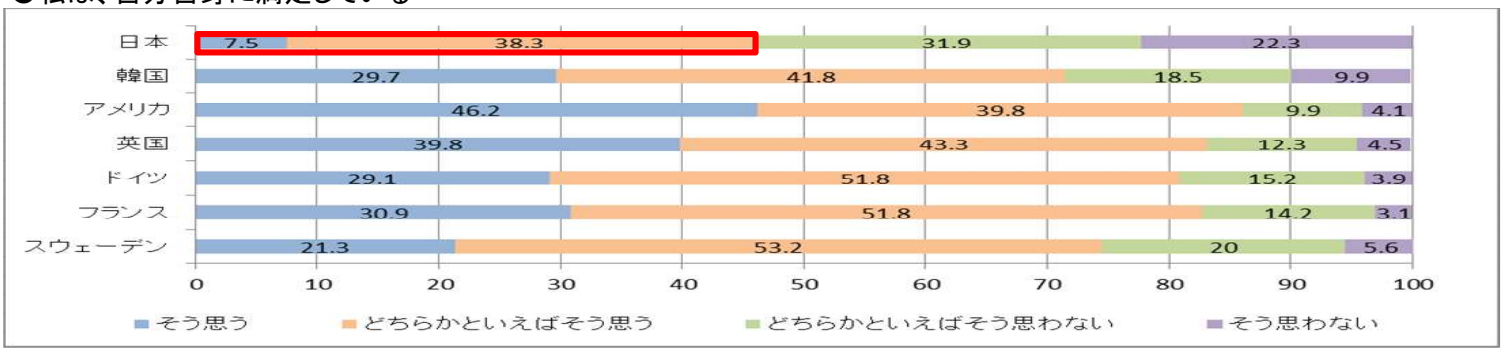
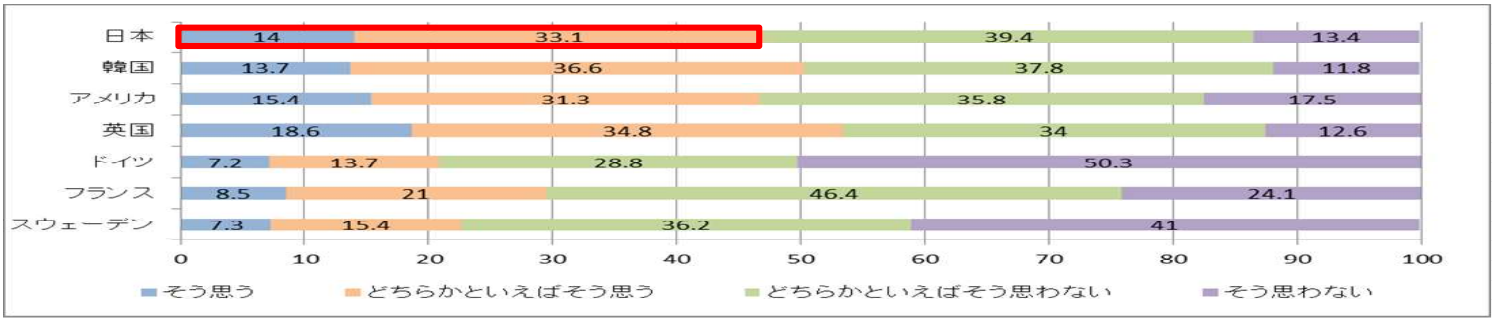


図6
●自分は役に立たないと強く感じる



※　平成25年度　我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（内閣府）の結果から作成。各図の数値の単位は%。

3－1　諸外国と比べた我が国の子供たちの自己肯定感

分析方法
内閣府が実施した「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成25年）」の結果において、自己肯定感に関する項目とその他の項目とでクロス集計を実施。

分析結果①
各国とも自己肯定感に関する項目（「自分自身に満足している」）と「長所」、「挑戦心」、「主張性」に関する項目（自己の中にある対自的なもの）は共通して関係がみられるが、日本においては「自己有用感」に関する項目（他者との関係の中にある対他的なもの）が他国に比べ強い関係がみられた。

図7：日本

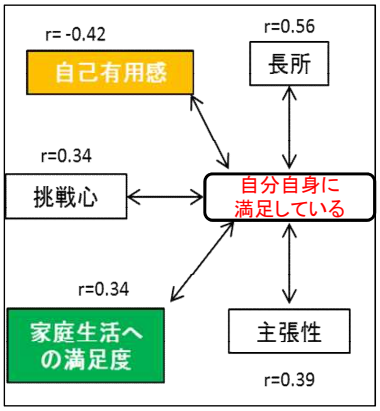


図8：アメリカ

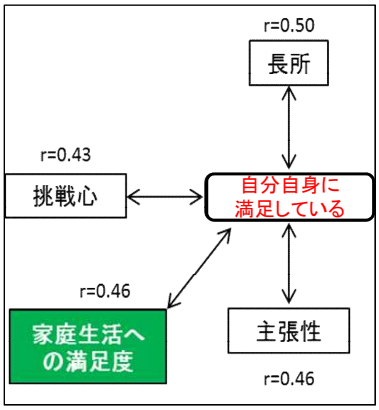


図9：韓国

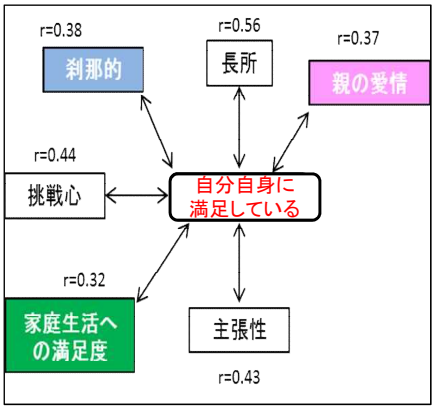
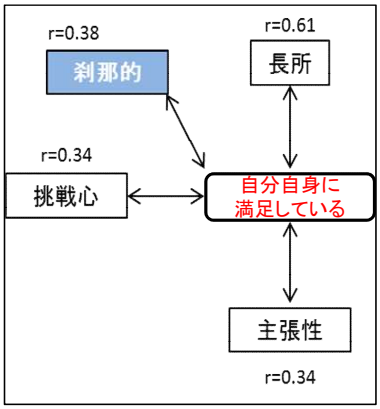


図10：フランス



※上記の属性に関係する具体的な質問項目は以下のとおり。なお、「r」の値は、項目間の関係の強さを示すものである。
長所：「自分には長所があると感じている」、挑戦心：「うまくいくかわからないことも意欲的に取り組む」、
主張性：「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」、自己有用感：「自分は役に立たないと強く感じる（逆転項目）」、
親の愛情「自分の親から愛されている（大切にされている）と思う」、刹那的：「今が楽しければよいと思う」
家庭生活への満足度：「家庭生活に満足している」

※図7～10は「加藤弘通　2014　自尊感情とその関連要因の比較：日本の青年は自尊感情が低いのか？」、平成25年度「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」（内閣府）から作成。

3－2　諸外国との比較分析からの考察

① 有識者ヒアリングにおいて、日本の自己肯定感が低いことについては、他者との比較の上で回答している可能性もあり、自分の状況を客観視できていることの表れであるとも考えられることから、必ずしも否定的にとらえる必要はないという意見もあった。

② 一方で、 自己肯定感が低いことが、他者との比較の中で、過度に「自分に自信が無い状況」や「自分を無価値な存在だと感じること」の表れである可能性もあり、この観点からは、

・日本従来の特徴、良さである「他者との関係の中での自己」としての「自己有用感」、
・「自己評価・自己受容」としての「長所」や「挑戦心」、
・「自己主張・自己決定」としての「主張性」

といった意識をバランス良く育み、子供たちの自己肯定感を高めていくことが重要である。

4　既存調査を用いた我が国の子供たちの自己肯定感に関する分析

分析方法
　各種調査における自己肯定感に関する項目（「自分には、よいところがある」、「今の自分が好きだ」等）と、その他の項目とのクロス集計を実施し、それぞれの調査の分析において、自己肯定感に関する項目と関係がみられるその他の項目について、分析を行った。

分析に用いた調査について

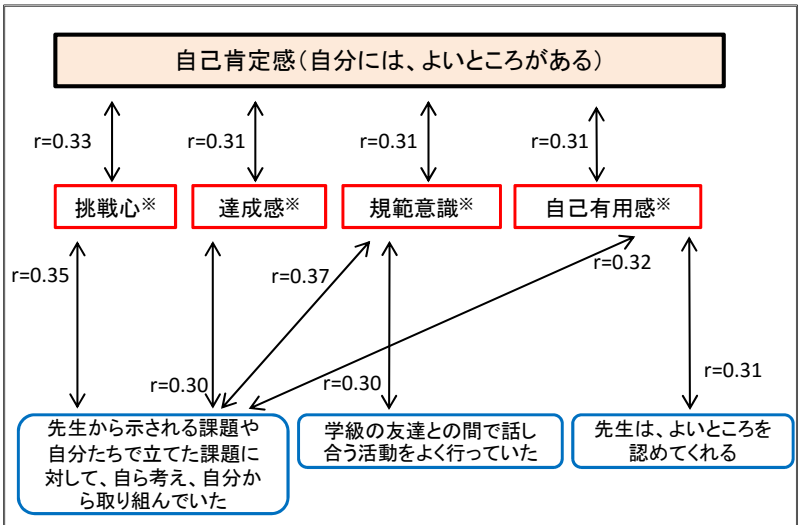
調査名（実施年度）	自己肯定感に関する項目
1. 全国学力・学習状況調査（平成28年度）	自分には、よいところがある
2. 青少年の体験活動等に関する実態調査（平成26年度）	今の自分が好きだ
3. 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成25年度）	自分自身に満足している
4. 高校生の生活と意識に関する調査（平成26年度）	人並みの能力がある／自分自身に満足（不満）／ダメな人間だと思うことがある

※①は文部科学省、②、④は独立行政法人国立青少年教育振興機構、③は内閣府が実施
※各種調査の調査対象は以下のとおり。
　①：国内の小学校6年生、中学校3年生
　②：国内の小学校4年生～6年生、中学校2年生、高等学校2年生
　③：日本、アメリカ、韓国、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンの13歳～29歳の青少年
　④：日本、アメリカ、中国、韓国の高等学校1年生～3年生

5　既存調査を用いた自己肯定感に関する分析結果

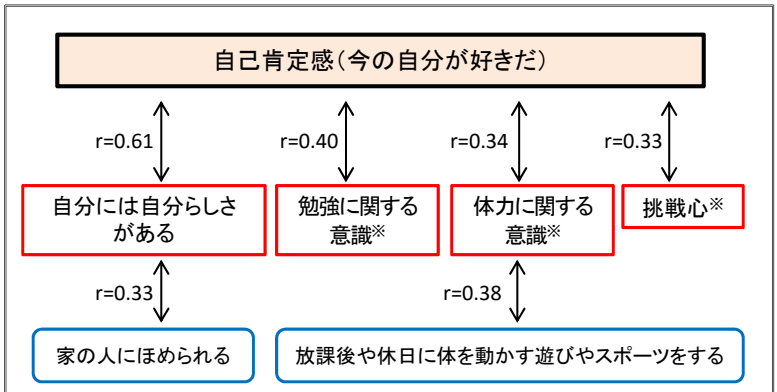
分析結果②
　各調査において、「自己肯定感に関する項目と子供の意識に関する項目（赤枠）」、「子供の意識に関する項目（赤枠）と他の項目（青枠）」との関係については、図11～14に示す関係がみられた。

図11（全国学力・学習状況調査）



※上記の属性に関係する具体的な質問項目は以下のとおり。
　挑戦心　　：「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している」、
　達成感　　：「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」、
　規範意識　：「人が困っているときは、進んで助けている」、
　自己有用感：「人の役に立つ人間になりたいと思う」

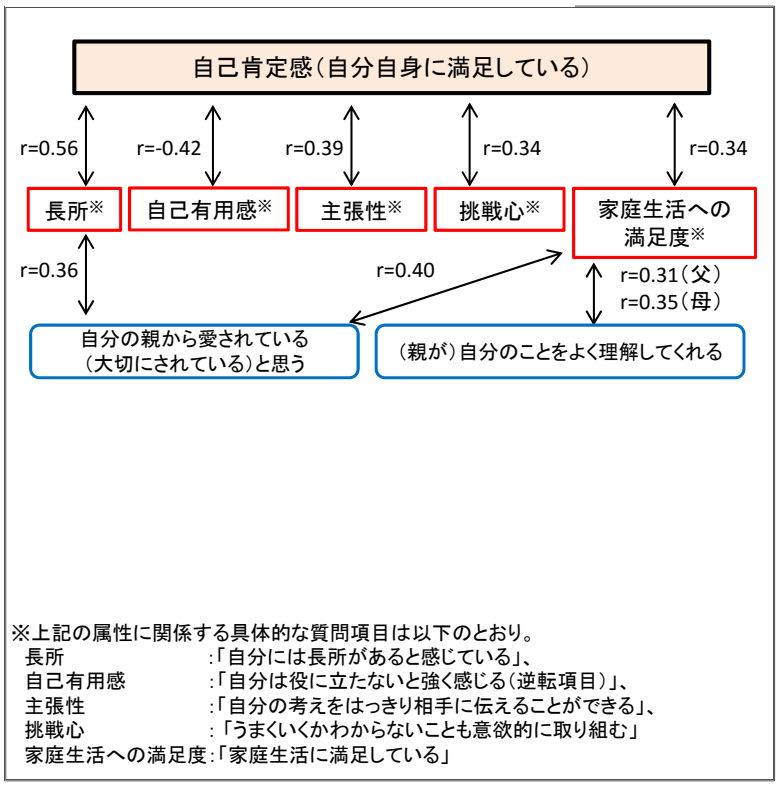
図12（青少年の体験活動等に関する実態調査）



※上記の属性に関係する具体的な質問項目は以下のとおり。
　勉強に関する意識：「勉強は得意な方だ」、
　体力に関する意識：「体力には自信がある」、
　挑戦心　　：「困ったときでも前向きに取り組む」

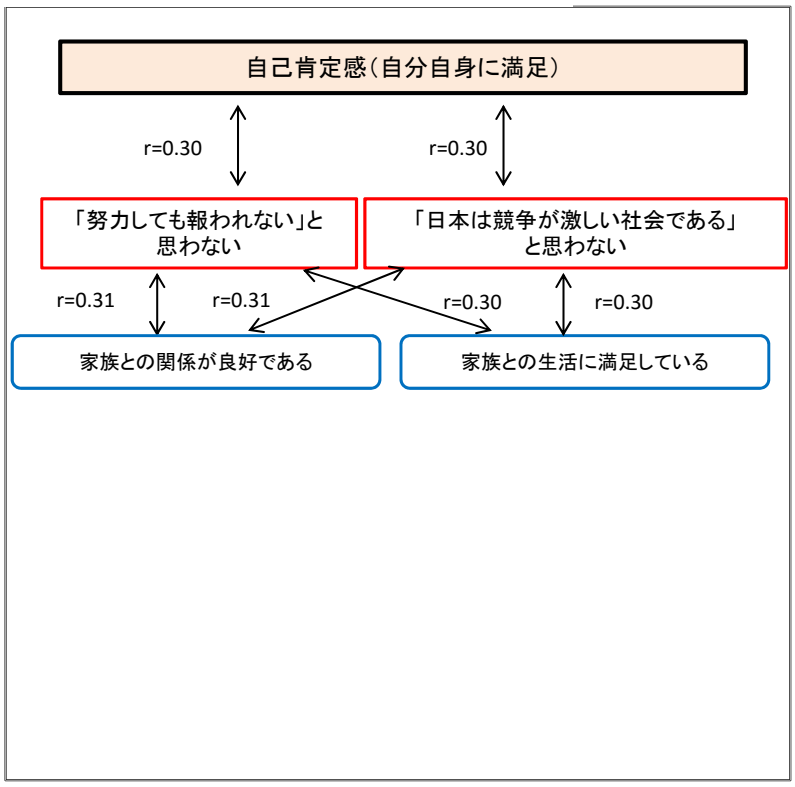
※「r」の値は、項目間の関係の強さを示すものである。
※図11については、小学校6年生の結果を示したもので、中学校3年生においても自己肯定感（自分には、よいところがある）と「挑戦心」、「達成感」について関係がみられ、「挑戦心」については、「先生から示される課題や自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいた」等の項目に関係がみられた。
※項目間の関係の強さについては、異なる調査間での比較はできない。

図13（我が国と諸外国の若者の意識に関する調査）



※上記の属性に関係する具体的な質問項目は以下のとおり。
長所　:「自分には長所があると感じている」、
自己有用感　:「自分は役に立たないと強く感じる（逆転項目）」、
主張性　:「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」、
挑戦心　:「うまくいくかわからないことも意欲的に取り組む」
家庭生活への満足度:「家庭生活に満足している」

図14（高校生の生活と意識に関する調査）



※「r」の値は、項目間の関係の強さを示すものである。
※項目間の関係の強さについては、異なる調査間での比較はできない。

6　既存調査の分析結果等を踏まえた考察

（1）自己肯定感と子供たちの意識について

各調査における自己肯定感に関する項目について、以下の関係がみられた。

（自己肯定感関連項目：自分には、よいところがある）
自己肯定感が高い方が、「挑戦心」、「達成感」、「規範意識」、「自己有用感」に関する意識が高い。

（自己肯定感関連項目：今の自分が好きだ）
自己肯定感が高い方が、「自分には自分らしさがある」、「勉強に関する意識」、「体力に関する意識」、「挑戦心」に関する意識が高い。

（自己肯定感関連項目：自分自身に満足している）
自己肯定感が高い方が、「長所」、「自己有用感」、「主張性」、「挑戦心」「家庭への満足度」に関する意識が高い。

（自己肯定感関連項目：自分自身に満足（不満））
自己肯定感が高い方が、「努力しても報われない」、「日本は競争が激しい社会である」と思っていない。

（2）自己肯定感と関係がみられた子供たちの意識を育むための取組について

① 自己肯定感と関係がみられた子供たちの意識について、他の項目との関係を分析したところ、主に以下の関係がみられた。

【学校の関わり】

・学級やグループで課題を設定し、自ら考え、自分から取り組むなどの主体的な学びや、友達との話合いなどの他者との協働等を行っていると回答した子供たちの方が、「挑戦心」、「達成感」、「規範意識」、「自己有用感」に関する意識が高い。

・「先生がよいところを認めてくれる」と感じている子供たちの方が、「自己有用感」に関する意識が高い。

【家庭、保護者の関わり】

・「家の人にほめられる」と感じている子供たちの方が、「自分には自分らしさがある」と思っている。

・「親から愛されている（大切にされている）」と思う子供たちの方が、「長所がある」、「家庭生活への満足度」に関する意識が高い。

② 有識者ヒアリング等からは、自己肯定感を高めるためには、

・他者との協働のなかで、子供たちが自分の役割を果たすとともに、

・子供たちが集団又は個人の目標を達成した際に、周りの大人が認めることにより、成功体験を感じさせる

という一連の取組を継続的に行い、子供たちの発達段階に応じた対応が重要という示唆が得られた。

（有識者ヒアリング等であげられた主な取組）

・学校における異学年交流や児童会活動

・職業体験や社会奉仕活動など地域と関わりながら学ぶ体験活動

参考資料

※ 図11～14で示した分析結果について、各調査項目における子供の割合を図示したもの

参考１　全国学力・学習状況調査における分析（図11関係）

図15 **挑戦心**

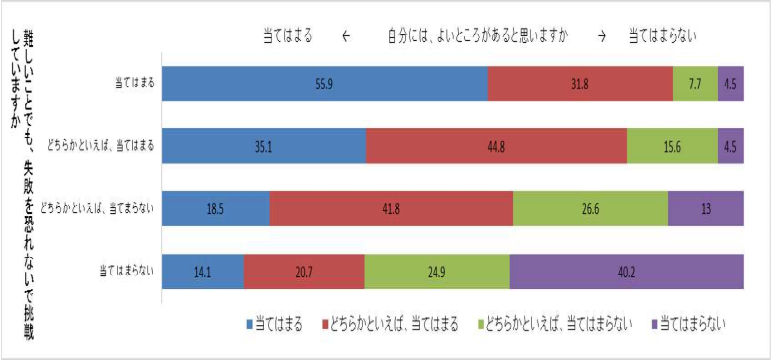


図16 **達成感**

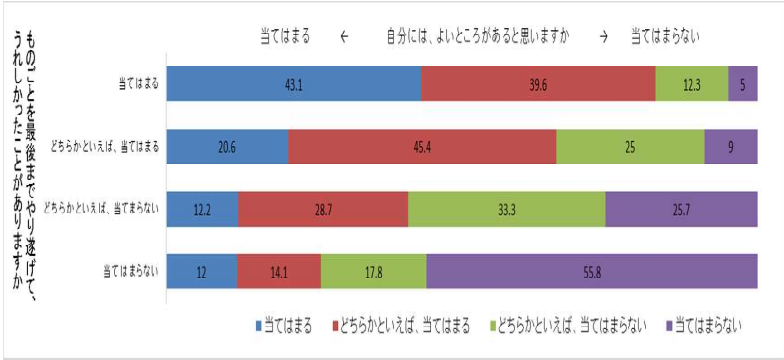


図17 **規範意識**

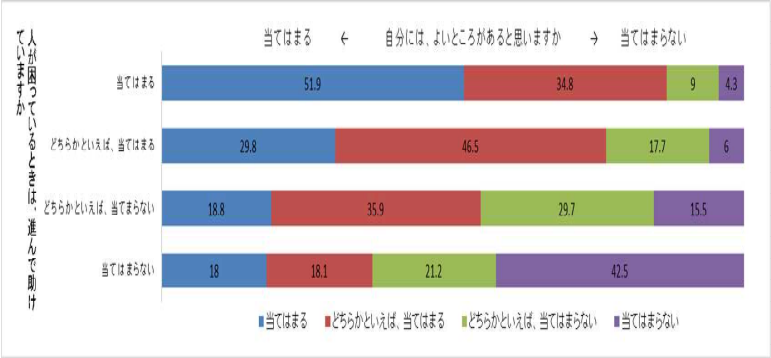
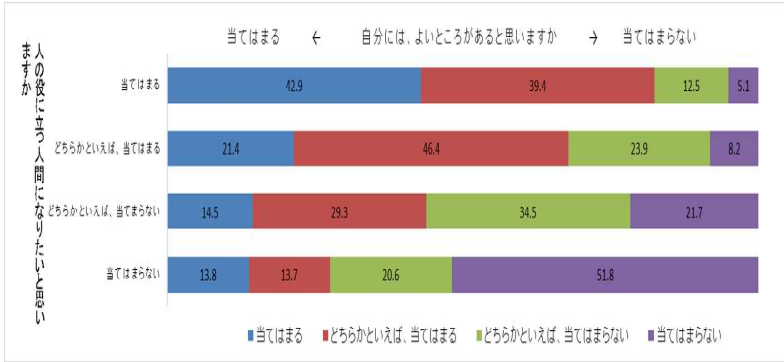


図18 **自己有用感**



※　平成28年度　全国学力・学習状況調査（文部科学省）の結果から作成。各図の数値の単位は%。
※　図15～18以外にも「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある」、「学校に行くのは楽しい」についても同様の関係がみられた。
※　図15～18は小学校6年生の結果だが、「挑戦心」、「達成感」、「学校に行くのは楽しい」について、中学校3年生においても同様の関係がみられた。

図19

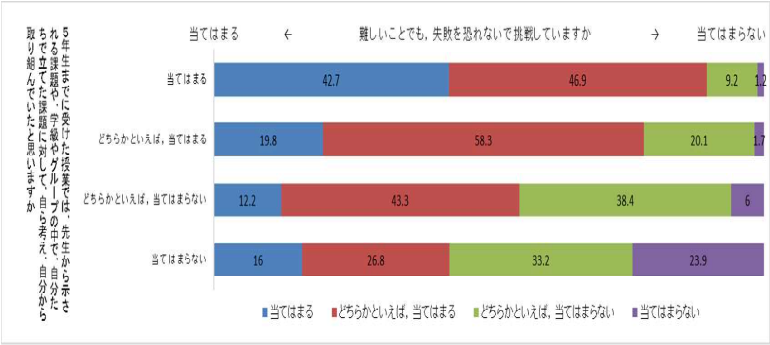


図20

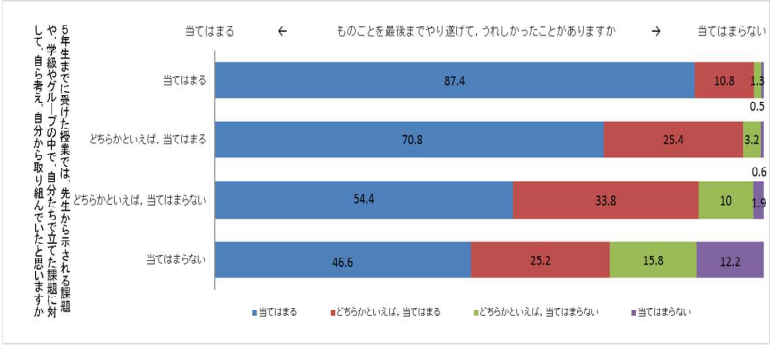


図21

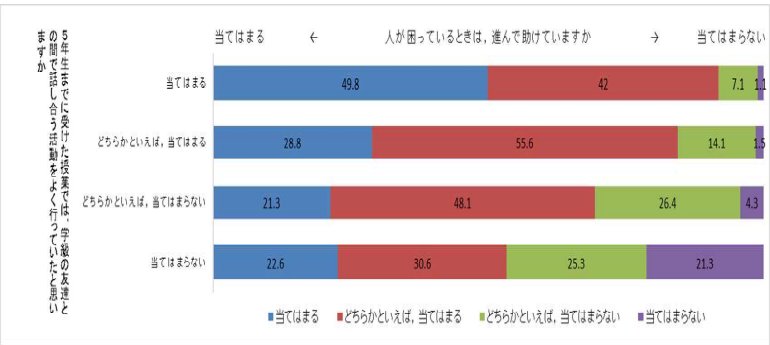
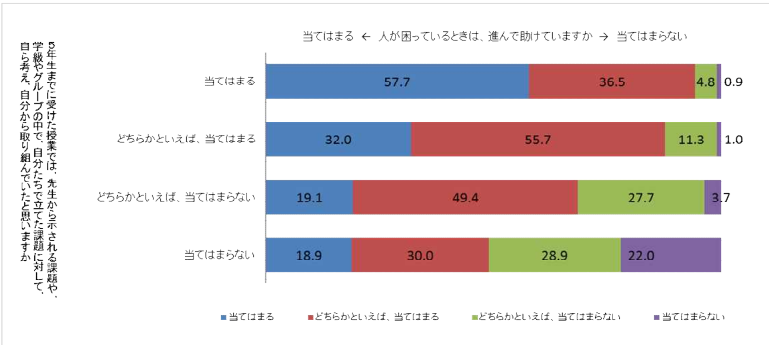


図22



※　平成28年度　全国学力・学習状況調査の結果から作成。各図の数値の単位は%。

図23

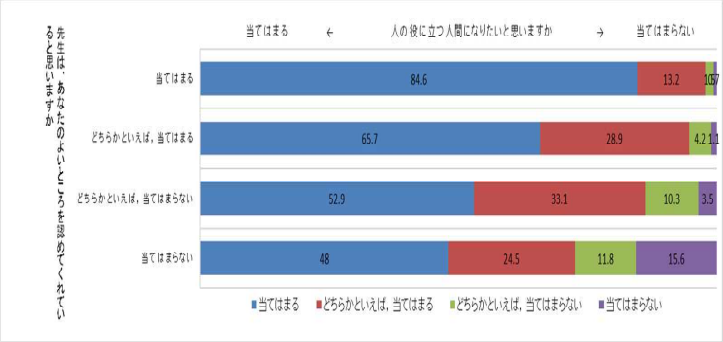
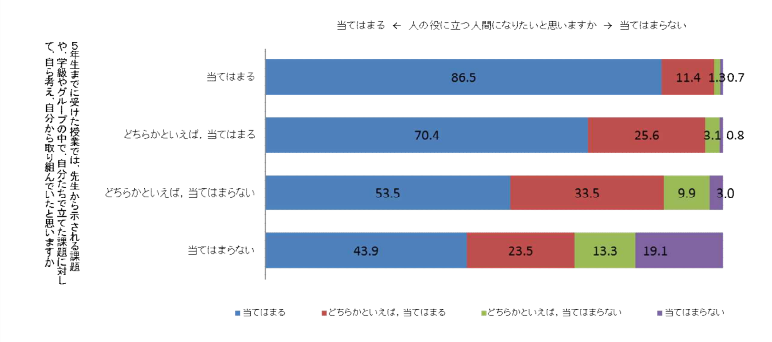


図24



※ 平成28年度 全国学力・学習状況調査の結果から作成。各図の数値の単位は%。
※ 図19～24以外にも、「友達の前で自分の考えや意見を発表することが得意」、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」、「学級の友達との間で話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えている」等の項目も子供たちの意識と関係がみられた。
※ 図19～24は小学校6年生の結果だが、中学校3年生においても、図19（中学校1、2年時に受けた指導として）や上記の指導等について、同様の関係がみられた。

参考２ 青少年の体験活動等に関する実態調査における分析（図12関係）

図25 自分には自分らしさがある

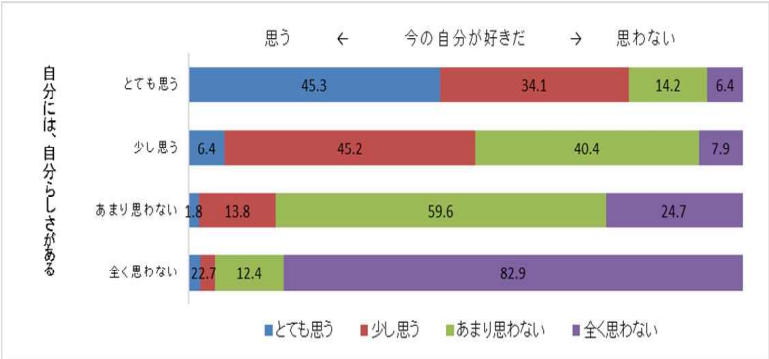


図26 勉強に関する意識

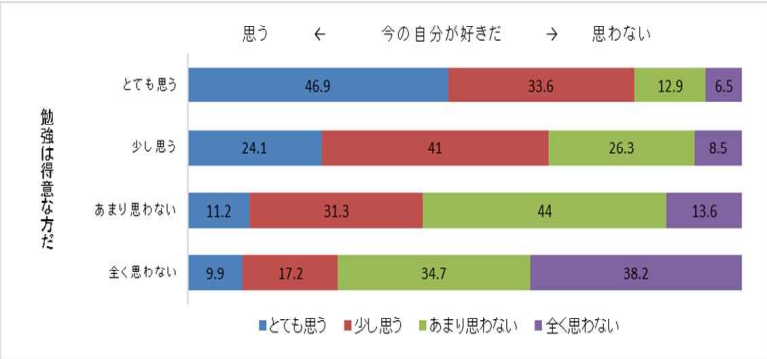


図27 体力に関する意識

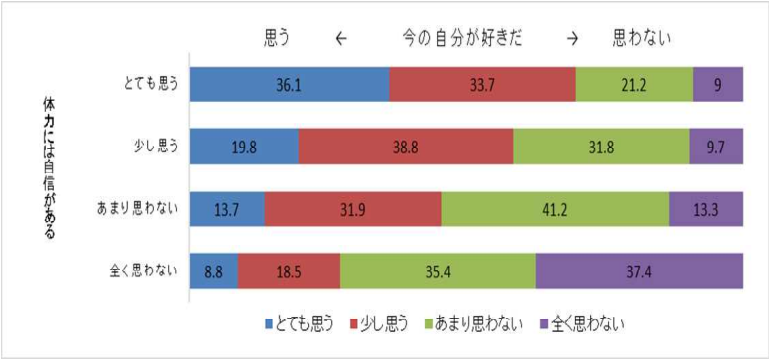
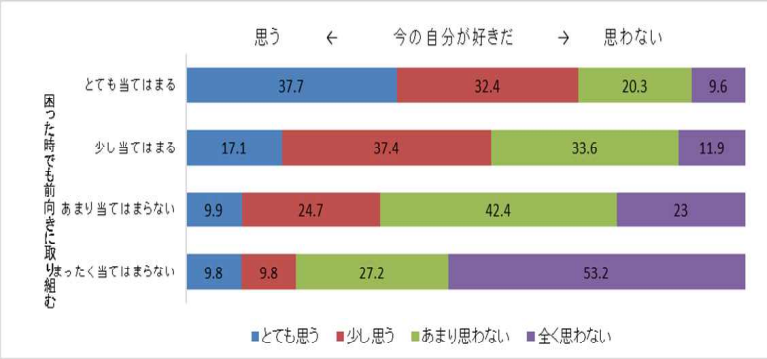


図28 挑戦心



※ 平成26年度 青少年の体験活動等に関する実態調査（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の結果から作成。各図の数値の単位は%。

図29

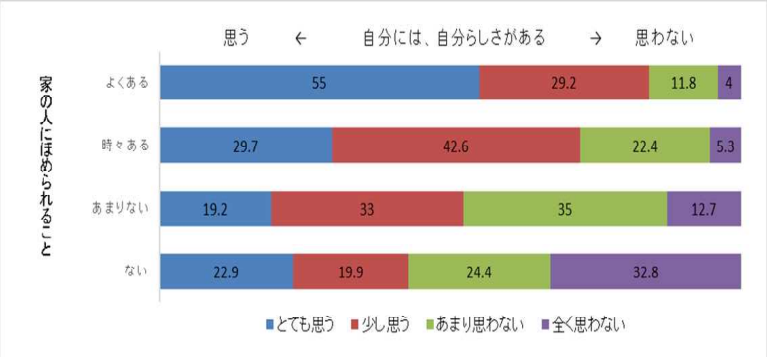
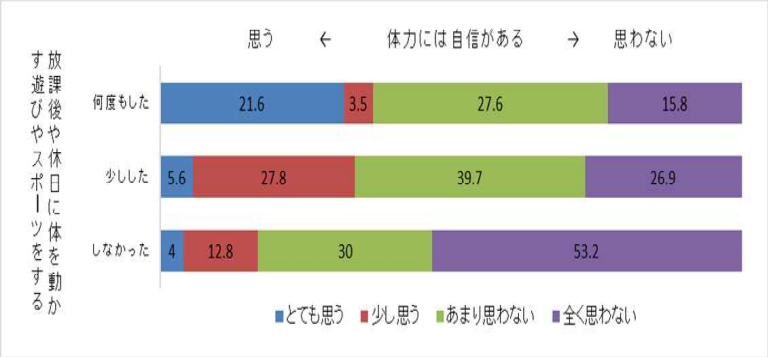


図30



※ 平成26年度 青少年の体験活動等に関する実態調査（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の結果から作成。各図の数値の単位は%。

参考３ 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査における分析（図13関係）

図31 長所

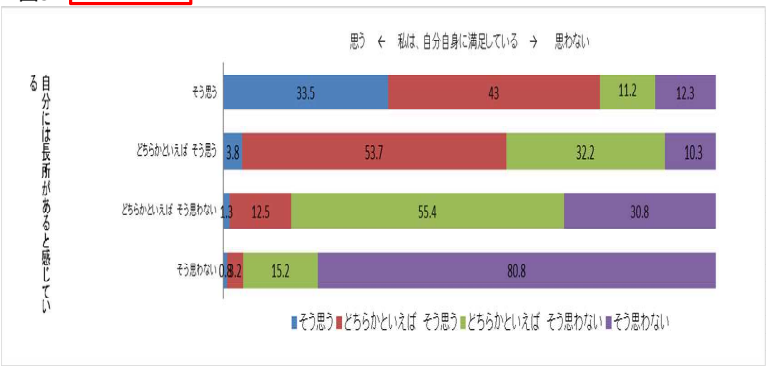


図32 自己有用感

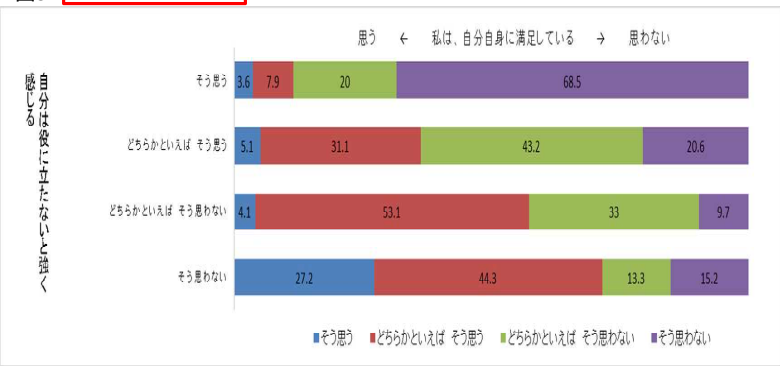


図33 主張性

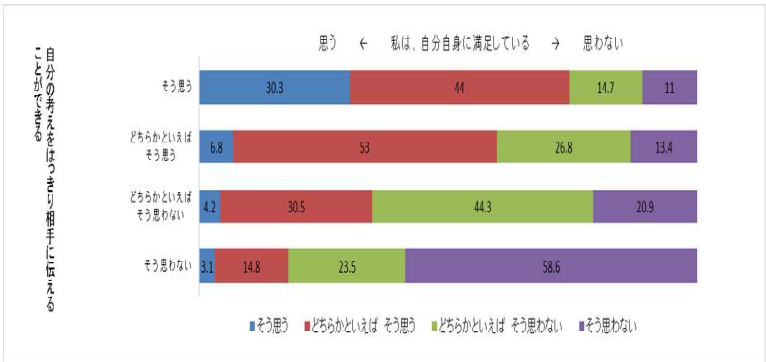
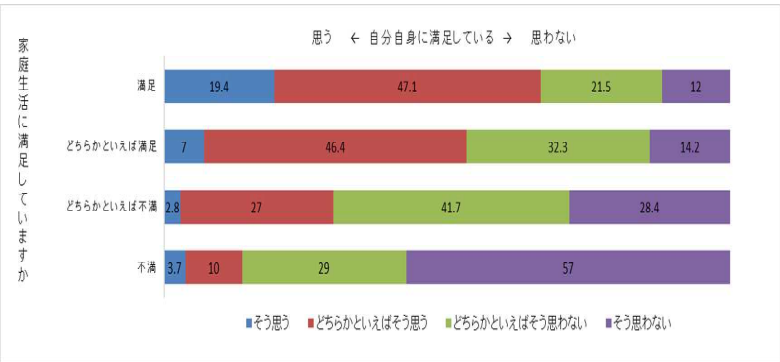


図34 家庭生活への満足度



※ 平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（内閣府）の結果から作成。各図の数値の単位は%。

図35

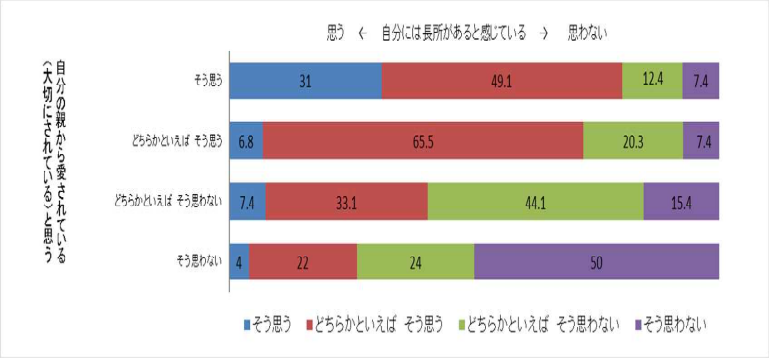


図36

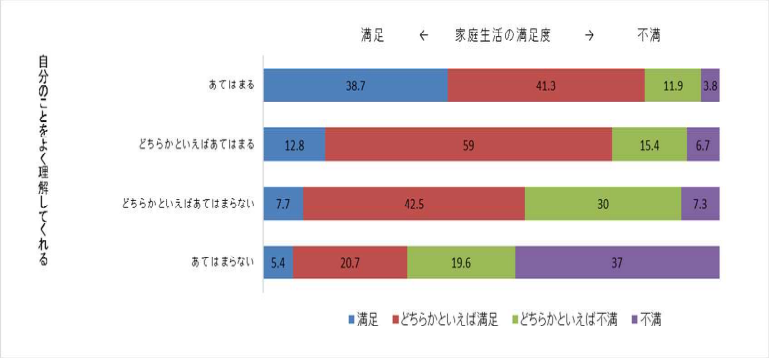
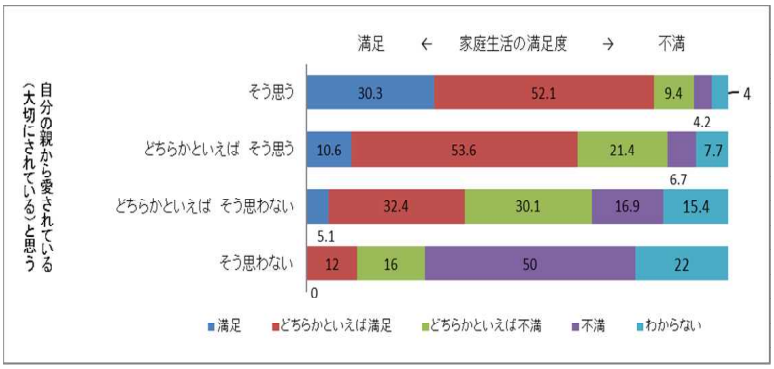


図37



※ 平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（内閣府）の結果から作成。各図の数値の単位は%。
※ 図36は親（母）が「自分のことをよく理解してくれる」ことについての関係を示したものだが、親（父）についても同様の関係がみられる。

参考４ 高校生の生活と意識に関する調査における分析（図14関係）

図38

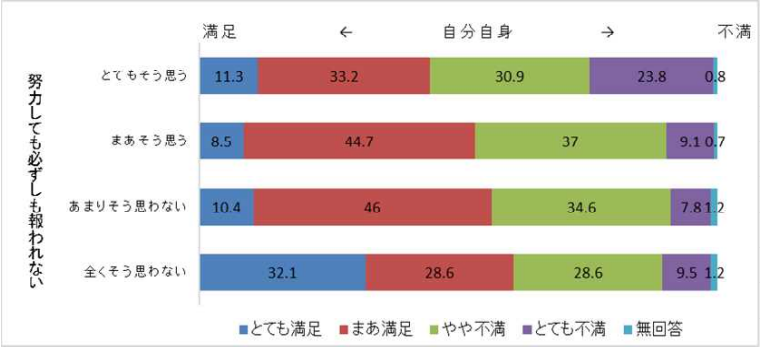


図39

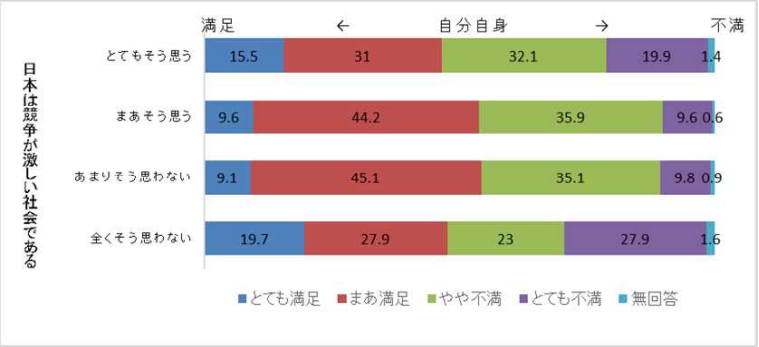


図40

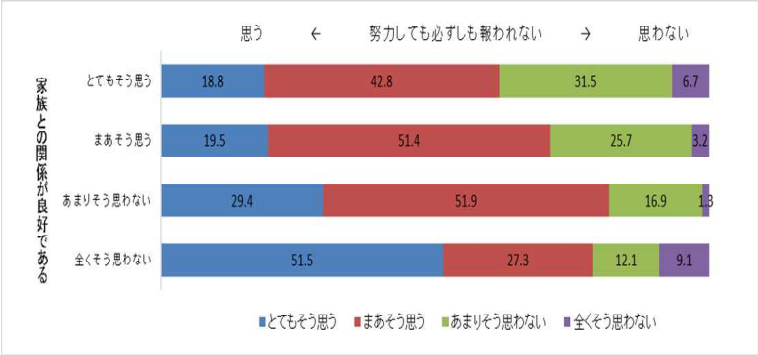
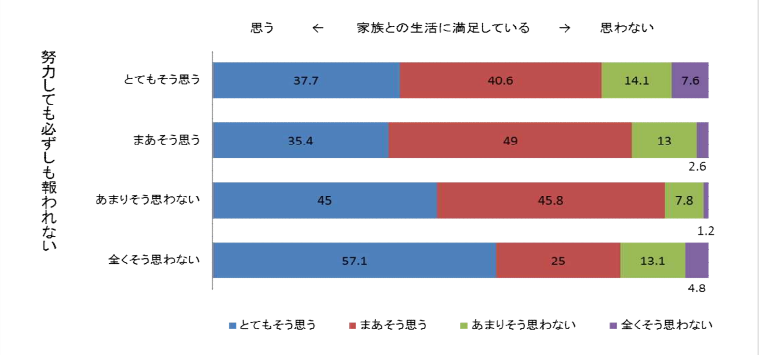


図41



※ 平成26年度 高校生の生活と意識に関する調査（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の結果から作成。各図の数値の単位は%。

図42

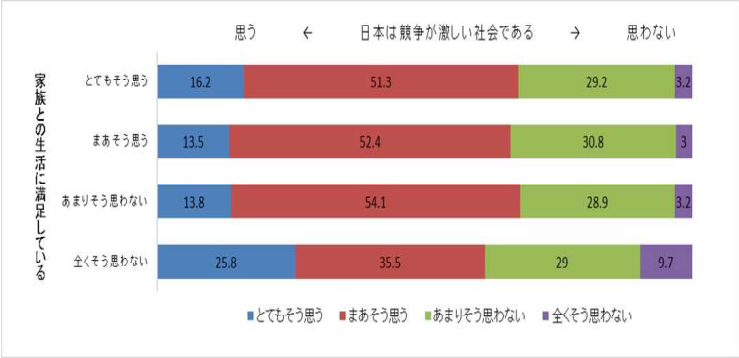
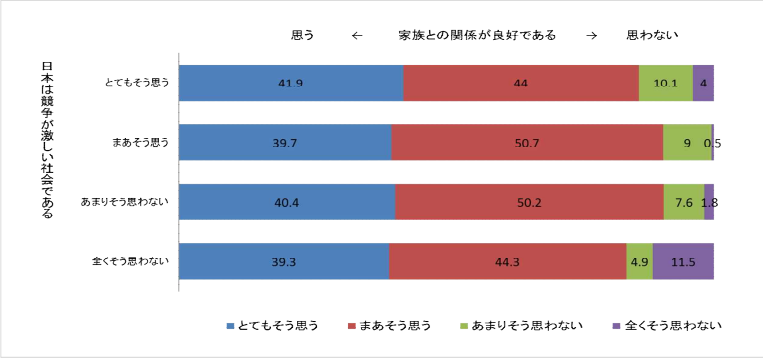


図43



※ 平成26年度 高校生の生活と意識に関する調査（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の結果から作成。各図の数値の単位は%。